

学会記事

第45回新潟内分泌代謝同好会

日時 昭和61年7月26日(土)
午後2時 開会
会場 新潟厚生年金会館

I. 一般演題

1. ¹³¹I-MIBG シンチグラフィの臨床的意義

小田野幾雄・武田 正之 (新潟大学)
酒井 邦夫 (放射線科)

昭和60年1月から61年6月までに褐色細胞腫を疑われた22例に対して、計30回の ¹³¹I-MIBG シンチを施行した。褐色細胞腫は8例あり、いずれも ¹³¹I-MIBG が著明に集積した。残り14例はその後の精査、他の画像診断および経過観察より褐色細胞腫は否定され、今回の検討では ¹³¹I-MIBG シンチの accuracy は100%であった。

Tumor/B.G 比は ¹³¹I-MIBG 静注後48時間よりも24時間の方が高い傾向にあり、optimum imaging time は24時間がよいように思われる。検出できた褐色細胞腫の最小径は2.0×2.0×3.0cm (13g)であった。肺転移のある悪性褐色細胞腫の1例では原発巣のみならず肺転移巣 (ca. 2.0cmφ) も良く描出された。8例における ¹³¹I-MIBG の集積の程度と、カテコールアミンの値や腫瘍サイズとの間にはあまり明瞭な相関はみられなかった。

2. 原発性アルドステロン症に対するトリロスタン (商品名デソパン) の治療効果

金子 兼三・鴨井 久司 (長岡赤十字病院)
内科
内分泌班一同 (新潟大学)
第一内科

Trilostane (副腎皮質 3β OH steroid dehydrogenase 経口阻害剤) の治療効果を原発性アルドステロン症 (PA) 9例で検討し、有効の結果を得た。1) 急性効果: PA 2例に Trilostane (T) 60mg を正午に経口投与すると、PAC, 17αOH-P は2~6時間後まで抑制されたが、cortisol, ACTH, PRA に有意の変動を認めなかった。2) 短期投与の効果: 術前処置として、PA 8例に T 240~480mg/日 (4分割投与) を1~2週間投与した。8例中無効例は1例のみで、4例で著効 (血圧、血清K正常化)、3例で有効 (血清K正常化したが、降圧

は不十分)であった。なおT投与中尿17KSの増加が認められた。3) 長期投与の効果: 78才と高令のため副腎腺腫摘出術を希望しない男性例に4年間 T480→380mg/日 (維持量) を投与した。T投与後 PAC は400から130~200pg/ml に抑制され、PRA は1.0~2.0ng/ml/h と正常化した。B.P はT投与前には Nifedipine 40mg/日投与下でも190/90前後であったが、投与後140~170/80~90mmHg と安定し、低K血症も正常化した。全経過を通じて副作用は認められなかった。

3. ケトアシドーシスを併発した末端肥大症の1例

岩崎 洋一・奈良 芳則 (燕労災病院)
内科
横山 元晴 (同)
脳神経外科

症例は35才の主婦。当初糖尿病性 ketoacidosis で当科に入院したが、その特徴的な顔貌より末端肥大症が疑われた。それに対する内分泌学的、画像診断学的検査の結果、Hardy IV型の左側下垂体GH産生腫瘍の存在が明らかとなった。引き続き当院脳外科にてHardyの手術が行われたが、経過は良好で目下 bromocriptine の内服なしで様子観察中である。糖尿病の悪化も認められていない。

なお、本症に於ける TRH・LHRH 試験の成績は次の通りであった。

	前	15'	30'	60'
TSH (μU/ml)	2.6	7.5	8.2	9.0
HGH (ng/ml)	73.7	>80.0	>80.0	>80.0
PRL (ng/ml)	54.2	90.1	82.9	79.0
LH (mIU/ml)	11.5	13.3	16.8	11.8
FSH (mIU/ml)	3.1	3.1	3.6	4.1
T ₃ (ng/ml)	0.23			
T ₄ (μg/ml)	3.4			

4. Empty sella に ACTH 分泌不全を伴った1例

佐藤 幸示・筒井 一哉 (県立ガンセンター)
八木 一芳・朴 鐘千 (新潟病院内科)
栗田 雄三

私達は最近、Empty sella に ACTH の分泌不全を来したと思われる1例を経験したので報告する。症例は60才女性。主訴は易疲労感、昭和56年より嘔声、59年より主訴あり。家人に顔が蒼いと云われ、10月9日来院。3kgの体重減少、GOT 41, Eo 5%, Na/K 比27。血中コーチゾールが2度の測定で3.6, 2.5μg/dl と低く、